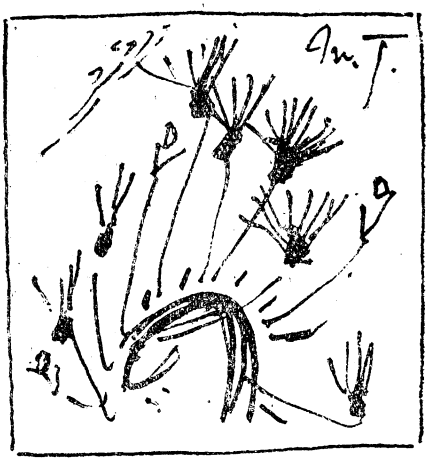

菌

森田草平

一

三人が日比谷公園を出た時は、晩春の永い日も最うとつぷりと暮れて、蒼黒いお濠の面を劇場の装飾電燈が夜天の空に仕掛け煙花でも見るやうにけば〳〵しく色彩つて居た。

一足先に立つて歩いて居た葉村さんは、少時其處に立停つたまゝ、何を考へるともなく凝乎と眼の行く方を見詰めて居たが、やがてつと振返つて、私達二人の顏を見い〳〵

『では、兎に角僕の宅迄行きませう。そして、用事を濟ましてから、淑子も一緒に青山の博覽會へでも行きませう　ね、左樣しやう――でないと、何うも今夜は退引ならぬ用事を控へてるんだから、此儘遠方へ行くのは困るんだ――』

葉村さんは斯う言ひ〳〵其處へ青山行の電車が停つたのを時機に、其方へ向いて歩き出した。

遠くの火影がぼかしたやうに落ちて居る薄暗い途端に立つて、私は窃とお久美さんの顏色を窺つて見た。

お久美さんも窃と私に眼眴ぜをしながら、葉村さんの意に從つちや不可ないと云ふやうに、お互の袖が縺れ合つた下で堅く私の手を握り緊めた。私はしつとりと冷たい水のやうなお召の手觸りを何となく快く感じながら、只何となく夜の空を見遣つて居たが、やがて

『では、私達はこれで失禮しますわ』と、葉村さんの方を向いて言ひ出した。

『如何して？　僕の許へ被入しやいよ』と、葉村さんは言ひ懸けたが、二人が到底動かない顏色を見ると、其儘口を噤んで電車の方へ近づいて行つた。直に又振向いて背後向きに歩きながら、『お久美さんの憤つた顏を見るのは珍らしいね。好く記憶えて置かうよ』と、ちらと眞白な齒を夕闇の中に輝かした。

『では、左樣なら！』と、私達は頭を下げた。

『左樣なら』と、葉村さんは不精無精に電車に飛び乘つた。

私達は動いて行く電車を見送らうともせず、其儘踵を返して仕舞つた。

『ぢや、銀座でも歩いて見ませうか』と、私はそれ迄握り合つて居たお久美さんの手を引張りながら歩き懸けたが、不圖葉村さんの最後に見せた表情が何となく氣懸りに成り出したので、

『ね、葉村さんは憤つて被坐しやるんぢやないでせうか』と、そんな事を途々言つて見た。

『憤るもんですか。「俺は色男だから、何處へ行つても持てるんだ」と思つて、却て悦んでるわ。』

斯う言つたお久美さんの言葉には、何かに物を打附けでもするやうな、捨鉢な語氣が含まれて居た。私は思はずお久美さんの顏色を窺つて見た。が、其儘默つて居た。

それから十分も經つた頃、二人は明るい銀座の街の或珈琲店の扉を押して這入つた。平常から呑氣で快

活な、物事に頓着しないお久美さんは、最う先刻の不愉快な表情は何處へやら失くして、好く話したり喰べたりした。

『貴方はそれがお所好ね』と、私はそんな事を言ひながらお久美さんと眼を見合せたりした。お久美さんの前にあるハムサラダの皿には、附合せにしたパセリが寂しく青い色を殘して居るばかりて、すつかり悉皆に成つて居るのてあつた。

『えゝ、私酸ッぱい物は何ても大所好よ。それは隨分お腹も空いてるんてすもの。先刻ね、葉村さんが何かお夕飯をおごれと言つたてせう。私も欲しかつたんだけれど、あの時三人て一緒に出て、何處かて喫べやうと思つたから何にも取らなかつたんだわ――葉村さんも隨分ね、葵館へ行かうなんて、活動て私達を抛つて仕舞ふ積りだつたんだわ。それから青山の博覽會へ軍艦を見に行かうだなんて、子供ぢやあるまいし、誰がそんな物見たいもんてすか。それに奥さんと一緒なんかなら窮窟だから眞平だわ。』

お久美さんは立續けにそんな事を饒舌つて居た。葉村さんに對する餘りに馴れ〳〵しい口の利き方が、一寸變だと思へば變だけれど、私も何だか陽氣な心持に成つて居たのて、其儘看過した。

『あのね、あれを左樣言ひませうか。』

何方からか左樣言つて、二人はお互に眼に懐ッこさうなしほを作つて顔を見合はすと、直ぐに給仕女を喚んだ。銀色をした電燈の光の下に、直樣二つの洋盃がちり〳〵と冷た相に並んて、天鵞絨のやうな艶を帶んだ青い酒がなみ〳〵と充された。

戸外へ出た時は、いきなり頭がくら〳〵とするやうな氣がした。すんやりと綺麗に延びた柳の芽が賑や

かな燈火に縺れて、ちら〳〵と何か斯う薄い金屬のやうな冷たい色をしながら輝いて居る下を、小造りなお久美さんに並んで、少し身丈の高い私が歩いて居た。飲み習はない精酒の加減でもあらう、私は無暗に顏が火熱つて、頭は何か膠のやうな厚ぼッたい物で密封されたやうな、何とも言へない重い感じがした。お久美さんも屹度同じやうな氣持でしたらう。あゝ、早く此の燈火の巷が遁れたいと私は思つた。そして、暗い冷たい夜の闇がひつたりと皮膚を襲ふ感觸を渴いたものが水を求めるやうに求めた。

『ね、暗い所へ行きませう。そして、冷たい風に觸れませう』と、私はお久美さんを促しながら、駈け出すやうにして兎ある横丁へ折れた。何時か二人は數寄屋橋へ出る暗い堀割の縁を歩いて居た。

『冴えかへる春の寒さに降る雨も――』

お久美さんは四邊に人が居ないのを見ると、何時か小聲に清元の一節を口ずさんで居た。お久美さんは左樣いふ趣味の女でした。江戸趣味と云ふ程のこともないけれど、都下で有名な某女學校の高等科を卒業して、今の日本の女としては普通以上の教育を受けた人でありながら、所謂女學生風が大所嫌であつた。髮は毎も銀杏返しに結つて、時には潰し島田なんかに揚げて、襟の附いたお召の着物などで人形町の通りを氣取つて歩いて居た。又時には地味な縞柄に黑繻子の帶を引掛けながら、髮頭を櫛卷きになんぞして私達を驚かせた。あれで最う少し器量が好かつたらと、私達は皮肉でも何でもなしに蔭口を叩いたものだ。それに御定目通り芝居が大所好で、歌舞伎や市村なぞは替り目毎に缺さない。そして、後で面白かつた幕なぞを想ひ出しては、又耐らなく成つて一人でこつそり立見に出懸けたりした。

役者の中では矢張羽左衛門が所好だと言つて居た。で、衣類から持物から、何でも立花屋に因んだもの

にした。一寸紙入を出しても、それには直ぐ渦卷の刺繍がしてあるし、長襦袢には橘の模様を染め上げるし、又自宅へ行けば鏡臺の上に市村格子の手拭が懸つて居ると云つたやうな工合でした。又若手の中では、近頃に成つてから壽美藏が所好だとか言つて――實はこれも人眞似なのでした。元來女には獨創のないものだけれど、お久美さんは殊に獨創のない女でした。誰かが壽美藏を好いと言へば、お久美さんも直ぐに壽美藏が所好に成るのである――毎も紙入の中に其素顏の小形の寫眞を入れて居た。何時ぞや葉村さんの家でお久美さんと落合つた時、何かの柏子に私が其寫眞を見附けて、戯談にそれを葉村さんの前へ持つて出ると言つて、一騷ぎしたことがあつた。すると、お久美さんは如何したのか平常に似合はず、むきに成つて、殆ど泣き出しさうな顏をして、私の手からそれを奪ひ返すと、矢庭にヒステリィのやうな手附でずた〳〵に引裂きながら、夏の街上に倒れた荷馬車の馬のやうな大息を吐いて、漸と胸を撫で下して居た。私も妙な事をするとは思つたが、其時は別に氣にも留めずに仕舞つた。

『私達も仕方がないわね。先日は眞野や吉川さんを引張つて歩いたし、昨日は昨日で二人で古屋さんの下宿へ押懸けて行くし、今日は又葉村さんを引廻さうとしたのね。本當に耽溺の生活だわ』と、お久美さんは稍あつて言ひ出した。

『それに、斯んなにしてお酒に醉つて歩いてるしね、本當にだらしがない』と、私も談戯らしく言つた。

『だけど、これが又眞面目に成ると淋しいのね。本當に遊蕩兒の心持が好く解るわ』と、お久美さんは生意氣なことを言つて居た。が、少時經つて、『だけど、お嫁に行くと斯ういふ事は出來ないのね。其處が獨身の氣樂なところね』と言ひ足した。

何時の間にか、先刻葉村さんと別れた日比谷の停留場へ來て居た。

二人は其處へ來た電車を見ながら、如何しやうかと云ふやうに、少時眼と眼を見合はして居たが、

『歩きませう。ね、其方が氣持が可いわ』と、左樣二人が一緒に言ひながら、線路を向うへ越して、柳の並木が水の底の藻でも見るやうに夜風に靡いて居る暗い濠端を、又ぶら〳〵歩き出した。

私は不圖別れ際の葉村さんの容子を想ひ返して居た。あの馴れ〳〵しいお久美さんの口の利き樣――それに伴れて、何時ぞや眞野の言つたことも想ひ出される。眞野が私の宿へ訪ねて來た折のこと、何かの話から葉村さんの噂が出て、あの方とお久美さんとの間に何か妙な關係でもあるやうに言つて居た。

『眞逆そんな事が――』と、私が強く打消すと、眞野は『貴方は近い所に居ながら、眼が及ばないのですよ』と、他人を冷笑するやうな口を利きながら、『葉村さんと云ふ人はね、女を喰物にして居るんですよ。さ、左樣言つては餘まり酷いかも知れないが、兎に角女が美しいとか美しくないとか云ふことには拘はらないのでさ』と、小憎らしい程得意げな色を見せた。

『だつて、眞逆――』と、私は却々肯じなかつた。

『嘘なら嘘にして置くが可いさ。其代り今度僕が如何しても嘘だと云へないやうな證據を見せて上げますよ。』

『ぢや、如何してあの奥さんが妬かないのです？』

『それは又妬かない理由があるのですよ。其奴まで言つちや餘まり葉村さんに氣の毒だから、此處ぢや言ひませんがね』と、眞野は人を焦らすやうに、眼に狡猾さうな笑ひを泛べながら、私を見返して居た。

私も眞野などに操られるのが可厭さに、其儘默つて仕舞つた。

て、今何かの切掛けからそれをお久美さんに訊いて居た。幾許親しい間柄とは云へ、平常なら左樣いふ露骨なことは一寸言ひ出せない筈だが、其時は何となく氣持が上ずつて居て、譯なく切出された。屹度私の血の廻りが如何かして居たのであらう。

『眞逆ね、そんな事があるものですか』と、お久美さんは强く頭振を掉つた。そして、一人默つてずんずん歩き續けた。が、私は妙な好奇心と、何か斯う生身を突き刺すやうな殘酷な心持とに迫られて、如何してもそれを聞き出さなければ居られないやうな氣がして來た。

『ゑゝ、私も眞野がそれを言つた時、嘘だつて言つて遣つたのよ。そしたら、眞野が今度嘘と言へない證據を見せて上げるつて——』

お久美さんはそれでも口を利かなかつた。が、其顏の線は堅く締つて、薄暗い中にも微に痙攣した唇をきゝと咬み緊めて居るやうに見えた。

『最う大分晩いのね』と、私は四邊を見廻しながら言つた。柳の下は黑い闇が層を成して重なつて居るばかりで、折柄通りがゝりの人影も見えない。只、眞暗なお濠の面に折々ぱた〳〵と水鳥の羽音らしい微な音が聞えて居た。

『えゝ』と、お久美さんは殆ど無意識のやうな鈍い返辭をしながら、矢張歩きつゞけて居た。が、不意に『電車に乘りませう』と言ひながら、私の返辭も待たずに、ぱた〳〵と五六間先に見える停留場の電柱の下へ駈け出して行つた。

電車は乗ると直に駈り出した。二人はがらんと空いた腰掛臺の上に膝を並べて坐りながら、お互に口を利くのも煩さいやうに默つて居た。私は折々窃と横眼を走らせて、お久美さんの窶れの見える横顔や、着崩れた衣紋の邊りを見詰めながら、何となく遣瀬のないやうな心持がした。

豐川稻荷の前で降りて、區役所の煉瓦塀に添うて寢鎮まつた暗い横丁へ曲りながら、私は何となく胸が塞がるやうな氣持で、つと寄添つてお久美さんの手を握つた。

『ね、今夜は私の家でお泊りなさい。』

『えゝ、左樣しませう』と、お久美さんも即座に承知した。お久美さんは此の近隣に新築の明るい小さな玩具屋のやうな家を借りて、其處に私立大學へ通ふ弟と二人で住んで居た。私は其近隣のしもた家の二階借りをして居た。

寢鎮まつた雨戸を敲いて、自分の部屋へ這入つた時、机の上の置時計は恰度一時の所を指して居た。

『兎に角熱いお茶でも淹れませう』と、私は小さな藥罐を下げて階下の臺所へ降りた。そして、瓦斯の昆爐で直ぐに白湯を煮立てながら上がつて來た。其間、お久美さんはさも勞れたやうに蒲團の上に横坐りに成つたまゝ、ぼんやりして居た。

『まア砂糖の罐でも出して置いて呉れば可いのに、怠惰者ね』と、窘めるやうに言ひながら、私は茶簞笥の中を搜して紅茶の罐を出しに懸つた。

『左樣ね』と言ひながら、お久美さんは矢張立上らうともしなかつた。

て、二人は熱いお茶を啜りながら、お互に勞れたやうな氣持で、少時は言葉もなかつた。

『ね、最う寝ませうよ。斯うして居ても仕方がない――』と、私は立上つて押入から夜具を取り出した。お久美さんもそれを手傳つて、二人で六疊の眞中に床を伸べた。

お久美さんは帶だけ褶んだまゝ脱ぎ捨てを衣紋竿に引懸けて、華美な長繻絆一つて、少時冷やりした疊の上に坐つて居たが、やがて何と思つたのか、

『あのね――』と、咽び上げるやうな聲で言ひ出した。『あの先刻のあれはね、眞實てす、眞實なんてす――』恰度臨終の病人が物でも言ふやうに喘ぎ〳〵引き千斷れたやうな聲が出るんだもの――

私は思はずどきりとしながら默つて其顏を見返して居た。自分で强ひて他人を傷つけながら、其血を見た時のやうな戰きが脊筋を走つた。

『だけど、考へれば只口惜しいと思ふばかりてすわ。自分で都合の好い時だけ私を勝手にして置いて――』

お久美さんの眼からは煮湯のやうな涙がぽた〳〵と膝に落ちた。そして、自分で吐き出す一語々々にだんだん情が激して來るかして、ぶる〳〵白い頸を顫はせながら、其儘耐らず其處へ咽び上げて仕舞つた。

私は眼の前に血の海の中をのた打ち廻つて居るやうな友達の姿を見ながら、凝乎と釘附けにされたやうな氣持に成つて、如何することも出來なかつた――聲を懸けて扶け起すことも、何とか言つて勞はることも。

お久美さんは途切れ〳〵に斯んな事を言つたのでした。お久美さんが葉村さんとそんな間柄に成つたのは、最う四五年も前のことで、お久美さんが恰度女學校を出たばかりの頃だと云ふ。そして、お久美さんはそれ迄葉村さんを愛して居たのでも何でもない。只不圖した機會に左樣成つたのだと言つた。又葉村さんの

心も少しもお久美さんの方へ引寄せられて居たのではない。葉村さんには現在其の愛して居る美しい夫人もあるし、其他にもお久美さん迄には到つて居ないても、始終葉村さんの心を惹附けて居る女友達や女弟子の二三人ないことはない。それが或時、或はづみから、つい自然の暴力に抵抗し得なかつたと云ふのだ。て、お久美さんはそんな事があつてからも葉村さんに愛されて居ない、葉村さんの心を少しも占めて居ないと知りながら、只葉村さんの道具に使はれて來た。幾許お久美さんでもそれを不滿足に思はない譯ではない。始終不滿足にも、口惜しくも思ひながら、矢張主人に打たれた犬のやうに口笛さへ吹かれたら、何處迄も尻尾を掉つて隨いて行く。

『これ迄も左樣だつた。これからだつて、屹度左樣だらうと思つてよ。私には如何してもあの人に結び着いた胖を斷つて遁げ出すだけの力がない。如何したら可いてしよ？　私如何したら可いてしよ？　ね、ね？』と、お久美さんは私の膝に手を懸けながら、長繻絆一枚の薄着の脊中を搖つて泣いた。

が、私は何とも言ふことが出來なかつた。只はづみ——はづみで、そんな取返しの附かないことをする。そりやア男女の肉の關係が戀愛から生ずるものでなくて、何かのはづみから出來るものだと云ふことは、或文壇の先輩の皮肉な口から聞いて、成程そんなものか知らと思つたこともあるにはあつた。が、現在友達が目の前に左樣成つてると聞いては、そして、そんな薄汚ない渦の中から如何しても遁れることが出來ないと聞いては、私には最う何一つ理解することも出來ないやうな氣がした。そりや氣の毒だとは思ふ。が、氣の毒だと思ふ前に——只汚ない。

『ね、斯うして居ても風邪を引くと不可ないから、最う寢ませうか』と、私は稍あつて精一杯優しい聲で

訊いて見た。

お久美さんは矢張疊の上に俯向いたまゝ、只默つて點頭いて見せた。

で、二人は並んで寢床に就いた。寢床に就いてからも、お互に違つた思ひに心を亂されながら、却々眠られるどころではなかつた。二人は何時迄もまじ〳〵と眼を睜きながら、苦しい寢返りを打つて居た。

『ね』と、お久美さんは何時か又私を喚び懸けた。『貴方、斯んな事を訊いても氣持を惡くなさらない？私に對する友情は變らない？』お久美さんの顏には、何時か涙の痕も消えて居た。

『如何して？』と、私は思はずお久美さんの顏を見返しながら、『妙な事を仰有るぢやありませんか。』

『だつて』と、お久美さんは少時言ひ澱んで居たが、『貴方は葉村さんがお所好なんでせう？』

『え、そりや尊敬して居ますわ。だけど、所好だなんて云ふことはありませんわ。だから、そんな事訊いたつて、何でもないぢや有りませんか。可訝しな人ね。』

が、斯うは言つたものゝ、私の胸には不圖今何かを悔ゆるやうな思ひが兆して居た。私は葉村さんに或親しみを感じて居れば、又先輩として尊敬もして居た。が、愛して居たのでは斷じてない。少くとも、自分では左樣思つて居た。それは葉村さんに對して、私が何物をも求めて居ない——寧ろ葉村さんの氣紛れな感情が私の上に走つて來やうとするのを不安に感じたり、又幾許か警戒するやうな氣持にも成つて居た。それだのに、私は不圖した好奇心から由ないことを聞きほぢつて、お久美さんから斯うした白狀をさせたのが、自分ながら耐らなく不快に感じられた。今迄憧憬して居た花野の霧が、今急に消えて仕舞つたかと思ふと、其處に人間の住み荒した、ごみ〳〵した、薄汚い光景が露出しにされたやうな、そんな口惜しさ

――とても云はうか、悲哀とでも云はうか、そんな物が胸一杯に成つて居た。私は他人がこれを嫉妬だと言ふのなら言はせて置く。が、自分では飽迄は言ひたくない。

『あの――ね、貴方憤つちや可厭よ、憤つて下すつちや可厭よ』と、お久美さんは澱み勝ちに言ひ出した。

『あのね、疾うからそれが知りたいと思つて居たの――』

お久美さんは私に、私も矢張葉村さんと或間柄に成つて居るのぢやないかと訊くのでした。私は驚いた。驚いて、腹立たしいやうな氣持で、お久美さんを見返して遣つた。

『妙な事を仰有るのね』と、私は思はず突懸るやうに言つた。お久美さんは私の氣に觸つたのを見ると、おど〳〵しながら、其儘口を噤んで仕舞つた。

が、考へれば、お久美さんの左樣思ふのも無理はない。葉村さんがお久美さんに對する態度は、眞個冷淡なものでした。何時、何んな折でも葉村さんがお久美さんに對する時、無論人前ぢやあるが、あの人の表情に少しでも溫かな影を認めることは出來なかつた。が、强ひて伴つてそんな容子をして居るとも思はれない。葉村さんはそんな性質の人ではなかつた。何何してもそれがあの人の本性であつた。が、それに反して、私には或程度のアフエクションを有つて居るやうに見えた。左樣いふ關係があるとは知らないから、私は隨分お久美さんの前でも葉村さんに親しげな、心置きない容子を見せて來た。それだのに、お久美さんは能く今迄私に嫌惡の色も見せずに、平氣で交際つて來られたものだと、不思議なやうな、今更相手の顏が見られるやうな氣もした。

で、私は出來るだけ葉村さんと左樣いふ關係ではないと云ふことを相手の腑に落るやうに辯解もすれば、

前後の事情を説明もした。お久美さんも最初は却々それを信じなかつたが、漸く得心が入つたと見えて、『貴方は本當に悧巧だわねえ』と、つく〳〵感に堪えたやうに言つた。が、それには少しも嘲弄の意味が含まれて居るのではない。心の底から出た言葉なのである。で、『本當に葉村さんのやうな人の自由に成つてちや耐らないわ』と、心から溜息を吐いて居たが、やがて又何やら想ひ附いたやうに言ひ出した。『貴方は偉いわねえ。所懐なら何だけれど――左様ぢやアないのでせう。それだのに能く――』

其言葉が最も好くお久美さんの性格を表はして居るやうな氣がして、私は思はず微笑まれた。

『奥さんは知つて彼坐しやるんですか』と、不圖又私は訊いて見た。

『えゝ、そりやア知つてますわ』と、お久美さんは平氣で言つて居た。『最初は何だつたけれど、葉村さんが打明けた方が都合が好いからつて言ふんでせう――私は可厭だつて言つたんだけれど、到頭話して仕舞つたらしいのよ。』

『ぢや、如何してあの奥さんが貴方だけには嫉妬がないのでせう？　可訝しいわね』

『えゝ、そりやアね。何うせ葉村さんのやうな人だから、左様いふ事を些ともしないで居られるとは、奥さんだつて思はないでせう。それに私のやうな女なら安全だから可いと思つて、まア諦めて居るんでせうよ。』

『眞逆――』と、私は言はずに居られなかつた。

『えゝ、左様よ。』

斯う言つたお久美さんの言葉には、別段皮肉もシニズムも含まれて居るやうには思はれなかつた。只、

當り前の事を當り前に言つて居るのである。

が、左様言はれただけでは、私には如何しても二人の女の心持が呑み込めない。お久美さんは葉村さんの家でも主人よりは寧ろ奥さんに親しみを有つて居るやうに、他所目には見えた。半襟を自分とお對にして奥さんに買つて來て上げたり、三人もある子供の面倒を見たり、時には又臺所なぞへ降りて働いて居ることもあつた。又奥さんにしても左様だ。自分の所夫の心を少しも矯め得ないで、只男の好いやうに成つて居る女だと思へば、それを憐んで遣るやうな心も或はあるかも知れない。が、それにしても、其女は矢張自分の所夫に肉體を與へて居るではないか。奥さんは如何してそれを汚いと思はないのだらう。眼の前に自分の愛するものが汚されて居るのを如何して見て見ぬ振りがして居られるだらう。それが感情の倒錯——デカダンの心持と云ふやうなものかも知らない。併し私には解らない、男を知らない私には如何しても不思議で成らない。

お久美さんは又話の序に最う一つ自分の秘密を打明けた。最初言ひ出すのは大分苦しかつたらしいが、斯う成れば後はすら〳〵と出る。寧ろ次の話を默つて居るのが却て切ないらしい。て、其話と云ふのは、お久美さんが葉村さんと左様いふ間柄に成つた後で、最う一人他の男と左様成つた。尤も、今ぢや最う關係はないと云ふのである。それは河上均と云ふ或新しい劇團に屬して居る一寸名の聞えた俳優で、脚本や小説なぞにもちよい〳〵指を染て居た。其人の細君が又河上深雪と云つて、元の藝術協會の女優で、お久美さんとは同窓の友でした。

『ぢや、貴方は同時に二人の男を所有して——と云ふか、それともされてと云ふか、まア左様成つて被坐

したのね。』

お久美さんは只點頭いて居た。

『ぢや、貴方は其時其の二人を同じ様に愛して被坐したのでせうか、それとも、其愛は何方かへ片寄つてたでせうか』と、私は又無殘な好奇心から再び押して訊いた。

『左様ね』と、お久美さんは少時考へるやうにして居たが、『そりや其時分は矢張葉村さんが可厭だつたわ。だけど、可厭だと思つたつて、左様いふ素振の出來る私ぢやアないてせう。』

私はにや〳〵しながら相手の顔を見返して居た。

『だけど、葉村さんはそんな事些とも感附いて居ないの』と、お久美さんは又少時して續けた。『私の知つて居る男は矢張自分だけだと堅く信じて居るのよ。』

お久美さんにはお久美さんだけの奸計が有る。て、私は更に

『深雪さんは知つてるんですか』と訊いて見た。

『いゝえ、些とも——』と、お久美さんは聲に力を入れて否定した。『あの女は自惚が強いんでせう。それに自分が美しいもんだから、自分の所夫が他の女に心を寄せやうなぞとは夢にも思つて居ないのですよ。』

『それに可笑しいのよ』と、お久美さんは更に言葉を繼いだ。『何時ぞや藝術協會が大阪へ興行に行つたことがあるでせう。あの時なぞ深雪さんが私にね、「私が留守に成ると河上が不自由で困るだらうから、暫時泊りに來て遣つて下さらないの？」と左様言ふんですもの——』

『て、貴方被往して？』

『まア可いわ』と、お久美さんはそれを制するやうに、そして皮肉な、寧ろ人の好ささうな薄笑ひを泛べながら、『それ位私を――と云ふよりも、まア河上さんを信じて居たんてせうよ。面白いてせう？　彼様成ると、それ位男が信用されるものかと思はれてね。』

『左様ね』と、私は生返辭をした。『だけど、信用される男も男だわ。』

『だけどね』と、お久美さんは甘い追臆を娛むやうな表情をしながら、一人で言ひ續けた。『矢張お互に折折、つとするやうなことを仕出來すものよ。何時か均さんと深雪さんと私と三人で市村座へ行つた時にね、均さんがバナヽの喫べ掛けを平氣で私の方へ差出すの――深雪さんは氣が附かなかつたやうだけれど、私本當に其時はひやりとしたわ。』

『貴方はね、如何して左様奥さんのある方とばかり戀をなすッたんてせうね。勿論偶然てせうけれど――』と、私はそれ迄考へて居たことを口に出して訊いた。

お久美さんも凝乎と眼を据ゑて考へるやうにして居たが、やがて

『私は戀といふことゝ結婚とは又別だと考へて居るわ。結婚と云ふ場合には、矢張戀なぞには據らないて、普通にちやんとした處へ嫁附きたいと思つて居てよ。そりや人間はお互に固まる時は、ちやんと固まらなくちや駄目てすからね――』

少時經つて、不圖見返ると、お久美さんは何時の間にか最うすやゝと徐な息を引きながら眠つて居た。

『まア隨分氣樂な――』と、私は心の中で呟きながら、ほの暗い電燈の灯影に、ところ〳〵隈取つたやう

に陰影の見える痩せた女の顔を不思議相に眺めて遣つた。そして、私も重い眼瞼を瞑つた。

二

それから二三日過ぎた頃、私は又お久美さんと連れ立つて葉村さんの家を訪れた。

玄關から賑やかな子供達に迎へられながら、私達は直ぐに茶の間へ通つた。恰度奥さんは長火鉢の前に赤ン坊を抱いて坐つたまゝ、花瓣のやうな可愛らしい唇に牛乳の瓶の吹口を含ませて居たが、私達が這入つて來たのを見ると、片手に座蒲團を取つて侑めながら、

『まアお揃ひで好く――毎度葉村が御厄介に成るさうで有難う御座います』と、私の方へ向いて鄭寧な挨拶をした。が、毎も不機嫌な時に見るやうに、何處となく薄蒼く隈の取れたやうな顔附をして、眼にも何處やら險相な色を帶びて居た。

奥さんは何か二言三言私達の方へ話し懸けながら、其處に落ち散つて居る新聞紙を褶んで片側へ寄せたり、忙し相に腰を浮かしたまゝ火箸で灰を掻き均らしたりして居たが、やがて立上がつて部屋を出しなに、『此間の上野行は途中で駄目に成りましたつてね』と、疳に響くやうな高笑ひを殘したまゝ、襖の外へ出て行つた。後に殘つた二人は一寸飽氣に取られたやうな顔をして、少時眼を見合せて居たが、お久美さんは默つたまゝ、つと兩方の人差指を額のところへ當てがつて、目眴ぜをしながら薄笑ひをした。

『絢ちやん、ばア、被入しやい』と、お久美さんは左樣言ひながら、奥さんが其處へ寢かせて行つた末の兒を抱き上げて、すべ〳〵した紅梅色の羽二重を見るやうな、柔かな頰に頰擦りをした。

『あら最う牛乳を斯んなに飲んぢやつて、これは絢ちやんぢやないでせう、菊枝さんが飲んぢまつたんでせう？　可厭ァな菊枝さんね』と、お久美さんはそんな事を言つて、傍にやにや笑つて居る上の女の兒を顧みながら、自分で立上がつて、臺所から又新に牛乳の瓶を持つて來た。そして、長火鉢の傍へ摺り寄りながら、鍋の中へ明けなぞした。

『ね、お久美さん、お三寶折つて頂戴な。それから鷺も、そして郵便屋さんもね、ね』と、上の女の兒は甘ッ垂れるやうに言ひながら、赤や青の色紙を摑んだ手にお久美さんの肩へ取縋つた。

『ま、待つて頂戴よ。小母さんは今牛乳を沸かして居るぢやありませんか。可厭な菊枝さんね。如何したんだか絢ちやんが泣き出したともつたら、菊枝さんが絢ちやんの牛乳を悉皆奪つて仕舞つて居るのよ。』

『よ、よう、お久美さんよう。』

『待つて被在しやいよ。本當に喧しいのね。お久美さんだなんて、小母さんと仰有いよ。』

『ね、小母さん、小母さんよう。』

お久美さんも笑ひ出しながら、『ね、菊枝さん、村田さんの小母さんに折つてお貰ひなさいよ。村田さんの小母さんはお上手だから。』

女の兒は又直ぐに私の肩へも縋つて來た。

『左樣ね』と、私も見兼ねて其兒のお相手に成つた。『ぢや、二艘船かかへ、船を折つて上げませう。ね、それから彌次郎兵衛が可いでせう。』

『あら私、そんなんなら知つてるわよ。最つと難かしいの、お三寶か郵便屋さん、ね、小母さん！』

『だつて、小母さんはそんなのは知らないんですもの。後でお久美さんの小母さんに折つてお貰ひなさい。』
『お久美さん、可厭だつて――』
『ぢや、小母さんが花を切つて上げませう。梅だの、櫻だのをね。さ、鋏を持つて被入しやいな。』
口笛を吹きながら、一番上の男の兒が廊下を駈けて來た。
『お久美さんも、村田の小母さんも來て居るのね。』
『あゝ滿さん、今晩は』と、私は鋏の手を止めて笑つた顔を其方へ向けた。
『小母さん、阿父さんのお部屋へ野田さんが來て被坐してよ。』
『左樣ですか。』
『――あら、なに、何でせう？　あら櫻だ、櫻だ！』
私が切りこまざいた紙を指先に擴げるのを待ち兼ねながら、女の兒は手を拍つて嬉しさうな聲を揚げた。
『小母さん、僕にもして下さいな。ね、僕にも。』
『今度は何だか當てゝ御覽なさい。』
『なに、何でせう、菊――あら左樣だ。ダリヤだ、ダリヤだ。』
『小母さん家にも咲くのよ、夏に成るとね。』
子供達は矢鱈に切りこまざいた紙片をダリヤだと言つて雀躍りした。
『何ですね、貴方方は！　左樣小母さんに取附いちやお煩さいぢやありませんか』と、そんな事を言ひながら、奥さんは時折茶の間に顔を見せたが、靜乎と其處に落着いては居なかつた。

『私最う歸るわ。何だか今夜は御機嫌が惡さうだから』と、私が歸りかけるのを、お久美さんは奥さんの氣を兼ねて、强ひても其處に落着きながら、

『そんな事しちや惡るいぢやありませんか。最う少し被坐しやいよ、私のお願ひだからさ』と、一人て氣を揉んて居た。

來客が歸つた後て、私達は葉村さんの書齋を訪れた。私は男との話の面白さに釣られて、其儘其處に話込んて仕舞つた。が、お久美さんは例の樣に直に又茶の間へ引いて、奥さんや子供の相手をして居た。

それても其晩は毎もより早く切上げて、私達は連れ立つて歸つた。其後お久美さんが一人て葉村さんの家へ行つた時、葉村さんは其夜のことを言ひ出して、『二人て又俺を連れ出さうと思つて示威運動に來たんだらう。村田さんはまア仕方がないけれど、貴方は本當に仕樣のない女だ』と、酷く叱られたつて、歸つて來て私に話して居た。

私は其後も時折葉村さんの家て、お久美さんと打突かつた。時にはお久美さんが泣く兒を慊しながら、臺所て水を使つて居ることも有つた。

三

若葉は日に〳〵黑味を帶んて、やがて白金色の烈しい光線が町々の甍に燬け着くやうな、男らしい夏が遣つて來た。

其頃葉村さんの奥さんは少し加減が惡るいとかて、暫らく寢床に就いて居る樣子てした。お久美さんは

左様成ると幾日も自宅を明けて、葉村さんの臺所を手傳つたり、子供の面倒を見たりして、忠實しく働いて居た。

ある暑い日の午後であつた。私は一寸した見舞ひの品を調へて、青山にある葉村さんの家を訪れた。見ると、奥さんは私の想つた程てなく、髪も揚げて、綺麗にお化粧までして起上つて居た。

葉村さんも恰度在宅であつたので、衆皆明るい茶の間に揃つて、水菓子なぞ摘みながら、いろんな噂話に日を暮した。お久美さんも襷を外しながら其處へ這入つて來て、凋れた單衣の皺を氣にして伸しながら、其仲間へ加はつて居た。て、日一杯面白く遊んて居たが、日が落ちてから私は暇を告げて歸らうとして、歸りしなに、窃とお久美さんの耳に囁いた。

『これから銀座でも散歩しやうぢやありませんか。待つてるから、左様言つて出て被入しやいよ。』

斯う言はれて、お久美さんは一寸考へたらしいが、

『だつて、今一寸そんな事言ひ出せないわ。』

『如何して?』と、私は訊き返した。

『如何もなくッてさへ淑子さんの御機嫌が悪るいのに、今そんな事を言ひ出したら尚更だわ』と、ぐさ〳〵に成つた銀杏返しの後れ毛を煩さ相に搔き上げながら、お久美さんは凋れた眼許をして言つた。ぐつたりと汗に成つた、着崩れた服裝をして、顏には白粉の痕も見えない。私は再び返す言葉もなかつた。何となく胸先へ涙が突懸けて來る程、只最う理窟はなしに、お久美さんの心根が可憫らしく成つた。

葉村さんは其頃ちよい〳〵或女の許へ遊びに出懸ける樣子てあつた。それは或會社員の奥さんて、多少

世間にも名の聞えた、所謂才貌共に優れた人でした。葉村さんは時々私の前で其女のことを言ひ出して、『此頃恭子さんと或方面で大分問題に成つたので困つて居るよ。ハスバンドの耳へ這入つても弱るしね。なに、そりや噂の出所は判つて居るんだが――』と、本當に困つたやうな、困らないやうな顔をしてゐた。『なに、恭子さんとは未だ戀と云ふやうなことには成つて居ないさ。友情に過ぎないのだよ。そりやア僕の方に左樣いふ要求が有れば、先方の家のことなど顧慮しないで突進んで行くんだけれど――』と、辯解らしいことを言つても居た。兎に角、二人の關係はそれ程深くは成つて居なかつたらしい。

が、そんな事で葉村さんの家は近頃大分波風が暴い模樣に見えた。お久美さんの話では、奥さんはいろんな事を泣いてお久美さんに訴へることも有るさうな。

ある日、奥さんは茶の間でお久美さんといろんな話の末、矢張恭子さんのことを言ひ出して泣いて口惜しがつた。恭子さんは其頃に成つて、折々葉村さんの家へも訪れて來る樣子でした。『散々外で引張り廻して置いて、其上又私の眼の前まで出て來なくッたつて可いぢやありませんか』と、奥さんは話の間にだん〳〵激して來て、涙の中から思はず突走るやうな、ヒステリックな聲を出した。

お久美さんは思はずはつとした。餘り感じのない人ではあつたが、此時ばかりは胸を石の搾木で搾め上げられるやうな氣がしたさうな。

『御免なさい。私が惡るいのです、惡るいのです。何卒許して下さい』と、疊に喰ひ附いて咽び上げながら謝罪つたさうな。『私の眼の前迄出て來て』と言はれたのが、お久美さんには鋭いメスのやうに身に徹へたらしい。

奥さんの方では別段お久美さんに諷刺る積りて言つたのでも何でもない。只一圖に恭子さんのことを思ひ詰めて、其女憎し〳〵と思ふばかりに、お久美さんと葉村さんのことは全然念頭になかつたのだ。

て、奥さんの方でもはつと思つた。そして、涙に濡れた瞳を上げながら、

『いゝえ、私こそ御免なさい。私は些とも貴方のことを思つて言つたのぢやないのよ。葉村があんなだから、貴方迄もそんな事にして仕舞つて、それは却つて私の方から謝罪らなければ成らないのです——私は本當に平常から貴方のことをお可憫相だと思つて居るのですよ。』

そして、二人の女は其時何物をも忘れて心から手を取合つたさうな。

私はお久美さんの此話をお久美さんには氣の毒な位興味を持つて聞いたものだ。

お久美さんは私にあの話を打明けて後、氣が置けるかして、何となく以前の様には親しまれない容子が見えた。以前は自分の家同様にして居た私の許へも、漸次に足を運ぶことが間遠に成つた。折々葉村さんの宅などで出會つても、何となく臆したやな表情を見せるやうに成つた。が、又何方からともなく葉村さんのことや、其家庭のことを言ひ出して、だん〳〵話が彈んで來ると、お久美さんは又我を忘れて、いろんな事を興に乘つて饒舌つたものだ。

『貴方はあんなに始終葉村さんのお宅へ往つて居て、葉村さんが平常奥さんにして被坐しやることを見たり聞いたりしても、別に氣持が惡くないの？』と、私は何かの序から斯んな立入つたことを訊いて見た。

お久美さんは俯向いたまゝ、毎例の癖て淡白く見えるやうな薄い唇を屹と嚙みながら、何時迄も默つて居た。

『そりや反對に此方が妬くんだから無法には無法でせうけれどね』と、私は相手の心持を酌んで遣るやうにした。『だけど、感情は如何することも出來ないでせう。』

『そりや矢張氣持は好くないと思ひますわ』と、稍あつてお久美さんは顏を擡げた。

『ぢや、子供に對しては――？』

『如何して？　子供なんか何てもないぢや有りませんか』と、お久美さんは微笑を含みながら訊き返した。

『だつて、そりやア愛する人に他の女の子供が有つたら、其子供にも嫉妬が起るぢや有りませんか。』

『如何して？』

『無論私には左樣いふ經驗がないから只想像ですよ。だけど、左樣思ふわ、其子供が何んなに父親の愛情を占めて居るだらうと思つて――』

『貴方は餘程嫉妬家だわね』と、お久美さんは笑ひ出した。『だけどね』と、又考へて、『そりや私も葉村さんの家なんかへ行つて、子供がごた〳〵居たり、葉村さんが老けて阿父さんらしい顏をしたりして居るのを見ると、つく〳〵情なく成るわ。』

『ぢや、矢張左樣でせう。』

『だつて、そりや子供を妬いてるんぢやないぢや有りませんか』と、お久美さんは、さも心置なく笑つて退けた。

私は他の事を考へながら默つて居た。

『葉村さんがね、何時か貴方は嫉妬家だつて言つて被坐したことが有つたわ』と、お久美さんは不圖想ひ

附いたやうに言ひ出した。『あの人はね、相手を自分一人で占めて居なければ居られない人だつて――』

『何時そんな事を言つて被坐して？』と、私は何となく擽られるやうな薄笑ひを泛べながら訊き返した。

『それからね――貴方憤つちや可厭よ、憤つて下すつちや可厭よ。其時に矢張葉村さんがね、村田は俺に惚れて居るんだけれど、少し可怖いから可厭だつて――』

『如何してゞせう？』と、私も思はず笑ひ出した。

『彼様いふ要求の多い女は煩さいんだつて――』

『一體、何時そんな事を言つて被坐したんですよ。』

『そりや斯う云ふ時になのよ。例の茶の間で二人が坐つて居てね――えゝ、子供達も淑子さんも寝て仕舞つた後でせう――其時葉村さんが私を前に置いて、「最うお久美さんも可厭に成つたから、誰か新しい女を世話して呉れい」だつて、隨分酷いことを言ふんですもの――そして、私が誰にしませうッて言つた時にね、葉村さんが左様言つたんですよ。』

『それからね』と、お久美さんは未だ笑ひを含んだまゝ言ひ續けた。『「吉崎さんは如何です？」ッて言ふとね、「うむ、あの女が好い」ッて言ふんでせう。だから、私が「吉崎さんも嫉妬家ですよ」ッて言ッて遣ると、葉村さんが、「ぢや、妬嫉家でも何でも闘はない、村田でも吉崎でも何方でも可いから取持つて呉れい」だつて、それで到頭笑ひ話に成つて仕舞つたのですよ。』

四

其後、私は暫らく田舎の方へ行つて居たのに、又東京へ戻つて來てからも赤坂の家は引越して仕舞つたので、餘り繁々お久美さんとも顏を合せる機會がなかつた。それに私も其時分から何と云ふ理由もなく葉村さんの家から遠ざかるやうに成つた。

年が暮れて、其の明けの年の春も未だ淺い頃、梅日和の暖かな日光が私の部屋の障子を明るく染めて居た。

と、珍らしくお久美さんが訪ねて來た。

『隨分久濶、いまいまの惡い程御無沙汰して居てね』と、お久美さんは派手なコートの裏を飜しながら、其處に脫ぎ捨てると、其儘後に隨いて私の部屋へ通つた。

『貴方も此頃如何して被坐しやるの』と、お久美さんは火鉢の傍へ躙り寄つて、翳した自分の細い指尖を凝乎と見詰めながら訊いた。

『如何ッて、別に。今日は何方かへお出懸け？』

『えゝ、一寸——伯爵のお邸まで。』

お久美さんは近頃日出新聞の婦人記者をして居るとのことでした。

『て、此頃は葉村さんの許へ被往して？』

『いゝえ、些とも、最うあれッ限りよ』と、お久美さんは聲に力を入れて言つた。

『左樣？　まア能くね』と言つたまゝ、私は別に强つて其譯を質さうともしなかつた。私には又私で思ふことの有る身である。

が、葉村さんの話を除いたら、二人の中に共通の話はない。二人は何やら手持無沙汰に成つた。お久美さんも浮かぬ眼許をして、少時疊の上を見詰めて居たが、やがて問はず語りに左様成つた理由を語り出した。

恰度、去年の暮のこと、葉村さんは一度恭子さんを自分の家へ連れて來たことがあるさうな。其時葉村さんにお酒の匂ひがして居たとかて、大分家の中が揉めたさうな。が、其時はそれて濟んだ。明けて此のお正月葉村さんの家に歌留多會があつた時、無論葉村さんの方から招いたものてあらうが、又其女が遣つて來た。それを見ると、奥さんの方ぢや餘まり圖々しいと云ふのて、大分權幕が荒く、其女の持つて來た年玉まて突返して、此場て直に歸つて貰ふやうに斷つて仕舞ふと云ふ勢てあつたさうな。が、其場に居合せたお久美さんが、それては餘まり何だか狂氣じみるから、先づ此場は私にお任せなさいと云つたやうに、窃と奥さんを宥めて置いて、そして、何氣なくお久美さんの口から早く其女に歸るやうに注意したのださうな。無論、お久美さんと其女とは前から顔見知りの間でもあつたのだ。が、後から葉村さんがそれを聞き附けて、お久美さんまて奥さんと一緒にそれを嫉妬して、寧ろお久美さんの方から奥さんを焚きつけてもしたやうに取つたらしく、酷く憤激して、お久美さんに絶交して仕舞ふと迄言つたのださうな。て、最う此方ても馬鹿々々しいから、それ限りに成つたのだと、お久美さんは言つて居た。

『其方が結句幸ひよ。私のためにも都合が好いんてすもの』と、歸りしなに、お久美さんは左様言つてコートの紐を結びながら、下駄の上へ降りた。が、思ひなしか、何處やら毎もの元氣がないやうに見えた。

それッ限りて、お久美さんの足は又ふッつり絶えて仕舞つた。勿論、私の方からも訪ねて行かなかつた。

花の咲く時分のことであつた。葉村さんの家では又四番目のお産があつた。私もお見舞ひに行かなければと思ひ〳〵日を過ごして、最う七夜も過ぎた頃のこと、近くの神樂坂まで用達に出た歸りに、坂の途中で不圖珍らしい女に出遭つた。それは元葉村さんの家に女書生のやうにして居た人で、今は某家へ嫁附いて居る人でした。

『隨分久濶、如何して被坐しやいまして？』

と、其人は懷かし相に問ひ懸けた。

『相變らずなの。』

私は左樣答へる外に仕方がなかつた。

て、そんな簡單な挨拶を交した後、何やら口が解けたともなく又葉村さんの家の話が出た。そして、今度のお産にも矢張お久美さんが出懸けて行つて手傳つて居ると云ふことが、其話の間から聞かれた。

『て、矢張女中のやうにして使はれて居るんですね。』

『えゝ、最う服裝も風も關はないで——あのお洒落の女がね。それに質屋の使まで爲せられてると云ふことでしたよ。これぱッかりは自分で經驗がないから、始めは身を切られるやうに可厭だつたけれど、今ぢや最う慣れて何ともなく成つたと言つて被坐したの——本當にあの方は好く盡すわね。』

『まアそんなに迄して——！』

『私も何だかあの方がお可憫相に成つてよ——行つて見て居ても。』

私は不圖暗いじめ〳〵した菌のやうなものを眼に泛べた。これはお久美さんの愛を象徴したものである。

ぱつと鮮やかに火炎の燃え上るやうな強さ――お久美さんの愛にはそんなものゝ影も見えない。が、腐つた汁液が皮膚に密着いて離れないやうな、にちや〳〵した粘り強い執着の力を持つて居る。それは最う誰にも、何んな女にも及ばない――

『矢張、あの女は如何しても左様成つて行くんだよ』と、私は心の中で吐息のやうに言ひ切つた。急に眼の前からあらゆる物の色彩が褪せて行くやうに、私は感じたのである。

――をはり――

此作は『太陽』の五月號に出る『燒跡に立ちて』の姉妹篇に成つて居る。これを讀んだ方は、序に向うのも一つ讀んで頂きたい。尤も、何方も讀まれなくつたつて差支ない。大正五年四月十六日、草平識す。